

上級者向け英語スペリング読み替え規則集 —音節に基づいたモデル—

English Spelling Decoding Rules for Advanced Learners: A Syllable-Based Model

横谷輝男

Teruo YOKOTANI

1. 序

筆者は近年、英語スペリングと発音の関係の上級学習者向け規則集開発に取り組んできたが、このほど全体像を示す段階に達したと感じるに至ったため、ここに披露の機会を求めたものである。どの部分が明瞭に発音されることが分かっている場合のみ利用可能となるものではあるが、指導者／学習者には少なからぬ益となるであろう。生成音韻論で言うところの規則と制約に基づいたものになっている。現行の音韻理論では McCarthy (2008) などで解説されている制約のみに基づいた理論が主流だが、これに沿った提示法は非専門家には不向きと考えるからである。全ての可能な出力を検討してその中から最適なものを選ぶということは、多くの学習者が困難に感じるであろうということもある。

本提案の特徴のひとつとして、音節という概念を大いに活用していることの他に、規則の適用順序指定が最少になっていることが挙げられる。規則というものを想定するとき、必ず検討しなくてはならないこととして、その適用順序がある。特に、「削除」という操作の扱いは非常に注意を要する。例えば一般的な英国発音では $\text{st}\underline{\text{a}}\text{r}$ のような語の母音字の発音はデフォルトの [æ] ではなく、[ɑ:] となる。直後に <r> があるからである。一方、 $\text{c}\underline{\text{a}}\text{rry}$ のような語ではデフォルトの [æ] である。これらに最終的な発音表示を正しく与える方法の1つとして次がある：(i) <r> には [r], <rr> には [rr] を与える；(ii) 強い <a> → [æ] という規則を適用する；(iii) 重子音の一部ではないということを含む一定の条件を備えた [r] の直前で [æ] を [ɑ:] に変える規則を star にかける；(iiib) carry では重子音 [rr] によりこの規則が適用されず、[æ] が保持される；(iv) carry の [rr] を [r] とする何らかの操作を加わせる。このような規則群を想定する場合、学習者は (ii) の母音規則、(iii) の調整規則、(iv) の重子音解消規則自体の他に、これらの適用タイミングも習得しなくてはならない。特に

(iia) → (iv) という順番が重要となる。逆の場合、star, carry のどちらにおいても母音規則適用の前に [r] が1つになるため、これらを正しく区別することができなくなるからである。削除もしくは他の大きな変化を表示に引き起こす規則に関しては常にこのような問題が付きまとう。制約主体の理論においても、関連する複数の制約間の格付けが必要となる。

本稿の提案する規則集では、このような問題点が最小限に抑えられていると言える。まず、基本的に個々の規則間に適用順序の指定がない。読み替え工程は5つの段階に分かれるが、適用順序に指定があるとすれば、どの段階で適用されるかのみで、しかも自然な流れの中にある。この指定を除けば、適用環境が整った規則はいつでも即座に適用可能である。加えて、「削除する」規則は存在せず、「無音化」という概念を文字だけでなく発音記号にも用いている。「最終的な仕上げの段階の発音表示に残らない」というもので、各工程の途中で記号を消したりするものではない。(Optimality Theory 創成期に活用され、McCarthy (2008: 209) で触れられている PARSE からヒントを得ている。) 無音化された要素は最終的な発音表示に残れなくても工程途中で各種規則に関わることが可能である。これにより、上述のような適用順序によって引き起こされる問題はかなりの部分回避されていると言える。

なお、念のために述べておくと、筆者は、本稿で示される規則等をそのままの形で学習者に与えるべきだと主張しているわけではない。英語スペリングと発音の関係に関わる知識をいくらかでも緻密性を持って伝える際にはこのような形が考えられるということを示しているにすぎない。実際の教材作成においては、規則名を含め全て、学習者にあった形に修正されることを想定している。

本稿の構成は次の通りである。第2節で各種想定を述べ、第3節では本規則集(およびその修正版)を提示するにあたって学習者に留意しておいてもらうべきことを綴っている。第4節は規則集の本体である。第5節で問題点および今後の方向性を示すなどし、提案全体を終わる。

2. 背景

2.1 提示対象者

本稿提案の規則集は、学習者として、発音記号に関する知識がある者を想定している。一般的な英語辞書の発音表示に使われる母音記号や子音記号がどのように発音されるか、強勢符号がどのような意味を持つかを理解している人々である。

2.2 対象語彙

本稿で扱う語彙は、上級学習者が身に付けておくことが望まれる単語を基本としている。例として Byrd のような人名が挙げられることがあるが、これは規則の例として適当なものが他に見つからず、止むを得ない場合のみである。

また、取り上げる語彙は基本的に内部に強い形態的境界を含まないものに限定している。複合語を扱うとしたらそれは内部要素のみで、所謂 Class II 接辞が付いたものは扱わない。-ing, 複数形、三人称現在形、過去形といった Class 接尾辞はそれぞれ別個に発音記号を与えられ、基体に単純に付加されるものとする。これにより、「音節構造構築は語境界を跨がない」、「重子音が解消されるのは、当該子音が同じ語の中にある場合」といった但し書きが不要となり、個々の規則を簡潔にできる。

2.3 発音表記

説明対象は Sinclair (2006) にある見出し語の英国発音を基本としている。指導の対象が米国発音であっても、参考になる面が少なくないはずである。ただ、Sinclair の表記では母音記号の続かない [r] が全て上付きになっているが、本稿では標準体とさせていただいた。読者にとってはこの方が認識しやすいであろうという判断からである

3. 学習者に与えておく背景

本節では、規則群そのものを提示する前に学習者に伝えておくべき項目を挙げていく。本稿が基づく各種想定を読者に向けて提示する場ともなっている。用語は基本的に他の文献で使われているものが多いが、できるだけ学習者に受け入れられやすいようにと筆者が作り出したものも少なくない。音韻論で音韻表示／音声表示と呼ばれるものを「発音表示」としたのはその一例である。一般的に使われている用語や概念については、紙幅節約のため、個々の出典提示は最小限に留めさせていただいている。

3.1 使用する発音記号

本稿においては、発音記号は Sinclair (2006) で使われている以下のものを使用する。発音記号は [] で囲む。

(1) a. 母音記号

- [æ, e, ɪ, ɒ, ʌ, ʊ] (ex. hat, head, hit, hot, hut, good)
- [ɑ:, ɪ:, ʊ:, ju:, ɔ:] (ex. spa, eat, food, use, cause)

- [aɪ, aʊ, eɪ, oʊ, ɔɪ] (ex. site, how, cake, no, boy)
- [aɪə, aʊə, eə, ɪə, ɔɪə, uə, juə, ɜ:] (ex. hire, hour, fare, here, coir, lure, cure, bird)
- [ə, i] (ex. about, city)

b. 子音記号

- [g, θ, ð, ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, ŋ, j] (ex. god, thin, this, show, genre, chin, joy, sing, yen)
- [f, v, p, b, t, d, k, s, z, h, m, n]

(ex. fire, yan, 網掛け部分は日本語ローマ字発音とほぼ同じ。)

3.2 「表示」と「音節」

本規則集では、読み替え作業において取り組まれる文字列を文字表示 (orthographic representation) と、これに対応する発音記号の連続を発音表示 (pronunciational representation) と呼ぶ。発音表示における発音記号は一貫して「記号」と呼ぶことにする。なお、「音節 (syllable)」という概念を使う。本来、音節は音のまとまりであるが、本規則集では文字のまとまりを表すことにも用いられる。各文字から成るまとまりを文字音節 (orthographic syllable) と、発音記号列が成す構成物を発音音節 (pronunciational syllable) と呼ぶことにする。

3.3 文字の種類について

文字には母音字、子音字の2種類がある。母音字は発音が主に母音となる文字で、子音字は発音が主に子音に相当するものである。これらは<>で囲む。下記にまとめる。

(2) 母音字と子音字

a. 母音字 = <a, e, i, o, u, y>

b. 子音字 = <b, d, f, g, h, j, k, l, m, n, p, q, r, s, t, v, w, x, y, z>

※ およびこれらの大文字。

<w, y> は基本的に子音字だが、dawn, maw, say, boyのように1つの母音に対応する文字連続の一部としても使われる。<y>は、sky, byなどにあるように単独の母音字ともなりうる。

3.4 母音記号と母音字の種類

母音を表す記号 (以降母音記号) と母音字の種類について述べる。それぞれ強いものと弱いものに分けられる¹。

(3) 強母音記号と弱母音記号

a. 弱母音記号 (weak vowel symbol)

弱く発音される母音を表す記号。

つまり、[ə, i, u, ɪ, ʊ, oʊ, u:] (下線部は弱く発音される場合)

b. 強母音記号 (strong vowel symbol)

(強めに) 明瞭に発音される母音を表す記号。(アクセント符号の有無は無関係。)

例) [æ, ε, ɒ, ʌ, eɪ] etc. (※ 弱母音記号でない母音記号全て)

[ə, i, u] は普通の発音では必ず弱く発音されるが、[ɪ, ʊ, oʊ, u:] は強い場合も弱い場合も同じ記号が使われるという点に注意が必要である。文字の分類は次のものである。

(4) 強母音字 (列) と弱母音字 (列)

a. 強母音字 (列)

1つの強母音記号に対応している母音字 (の連続)。□で囲まれる。

b. 弱母音字 (列)

強母音字 (列) 以外の母音字 (の連続)。

○で囲まれたり、'wk' と示されたりすることがある。

c. 例: <pand> [pænd], <act> [ækt], <best> [bést], <bird> [bɪrd], citi [síti]
○による囲み、wk といった記号で明示されることもあるが、□で囲まれていなければ弱母音字である。発音されない母音字も弱母音字となる点をご留意いただきたい。

なお、例えば と [b] のように、同じローマ字が文字としても記号としても使われることがあるが、規則の中には文字／記号どちらにも通用するものがある。ついては、文字か記号かを問わない場合はこのことを「|」で囲んで表すことにする。例えば |h| は「[h] または <h>」という意味である。「|」で囲まれたものは「(表示) 要素」と呼ぶ。

3.5 「... 列」と代替記号

「... 列」という言葉は、文字や発音記号が1つしかない場合も指すことがある。例えば、<n> も <nt> も子音字列であり、<a> も <ai> も母音字列である。発音記号に関しても同様で、[p] も [pt] も子音記号列で、[i:] も [i:æ] も母音記号列である。なお、母音字と母音記号が1対1の関係になっており、規則においてそのことが重要である場合は、「単一母音字 (single vowel)」という言葉を使う。加えて、表示要素の代替記号として下記を用いる。

(5) VCX

- a. <V> = 何らかの母音字列; [V] = 何らかの母音記号列
- b. <C> = 何らかの子音字列; [C] = 何らかの子音記号列
- c. <X> = 何らかの文字列; [X] = 何らかの発音記号列
- d. |V|, |C|, |X| = 文字でも記号でもどちらでもよい場合

3.6 「規定」に関する取り決め

各種の規則や決まり事のことを総じて規定 (regulation) と呼ぶことにする。規定に関して次の取り決めがある。

(6) 規定における小文字優先性 (Lower Case Priority in Regulations (LCPR))

- a. 規定に現れる文字には小文字が使われる。
- b. 特別な指示がない限り、小文字部分を大文字にしても当てはまる。

(※ 例えば、<ee> → [i:] という規則は <EE> にも適用される。)

これらは当然のことと言えるが、次に関しては注意が必要である。

(7) 規定の意味と優先性

- a. “... → Y” は、「Y という記号／符号が {(代わりに) 与えられる／付加される}」という意味であり、「Y と発音される」という意味ではない。
- b. 規定は全て、「他に特別な規定が当てはまらない場合はこうなる」というものである。

(a) について説明する。本規則集では主に、検討対象の文字列に発音記号を与えるということを行っていくが、そういった記号付与のほとんどは途中経過に過ぎず、与えられた発音記号が他の規則によって変えられてしまうことがある。よって、例えば、「<a> → [æ]」を「<a> は [æ] と発音される」と言ってしまうのは本規則集においては必ずしも正しくないのである。

(b) は、具体的には次のことである。2つの規則を例に取る。(丸括弧内の‘◆ ...’は規則適用の条件を表す。以降においても同様。)

(8) (i) <a> → [æ] (ex. <hæt, mæt>, etc.)

(ii) <a> (◆ 語末) → [ɑ:] (ex. <spɑ>, <skɑ>, etc.)

(i) は、「<a> には [æ] が与えられる」という規則で、(ii) は「語末の <a> には [ɑ:] が与えられる」というものである。従って、厳密性を求める場合、最終的に正しい発音を得るには何等かの方策が必要である。さもないと、(ii) の規則で [ɑ:] が充てられても、その後 (i) によって [æ] に書き換えられ、[spæ] という間違った表示ができかねないからである。これは (i) の規則に「<a> が語末にある場合を除く」という但し書きを付けることで避けられるが、同様のことは他の規則にもあるであろうから、能率的なやり方とは言えない。そういった但し書きをなるべく使わずに済ますための手段が (7b) の取り決めというわけである。

3.7 音節に関して

本規則集では「音節 (syllable)」という理論的構築物を用いるが、その構成要素には下記があるものとする。

(9) 音節の構成要素

- a. Nucleus (Nuc) = 音節の柱／中心となる要素
- b. Onset (Ons) = 音節内で Nuc より前にある子音要素 (の連続)
- c. Coda (Co) = 音節内で Nuc より後にある子音要素 (の連続)

なお、単語内および音節に基づいた文字や記号の位置を表すのに次の略号を用いる。

(10) Initials and Finals (I&F)

wf = 語末, wi = 語頭, sf = 音節末, si = 音節頭

※ w = word, s = syllable, f = final, i = initial

音節構造の構築は次の想定に基づく。

(11) 構造の共有

発音記号が文字の発音を表すものであると同時に、文字は発音記号の言い換えであるとも言える。よって、音節構造構築は発音記号を基に行われるが、その構造は文字列とも共有される。音節内の位置についても同様である。例えば、[t]が発音表示上で onset であれば、これに対応する文字表示上の <t> も onset である。

3.8 規則の適用順序

各種規則の適用は下記に示すように5つの段階 (stage) に分かれる。各段階においては、まず指定された少数の規則が (時には定められた適用順序に従って) 適用される。段階を指定された規則が指定された段階以外で適用を検討されることはない。これら以外の他の規則は、第2、第3の主たる規則 (Main) の後で適用が検討され、可能であれば即座に適用される。各段階に位置するデフォルト規則で与えられた記号が、後に他の規則によって変えられることもある。

- Stage 1: 準備
- Stage 2: Main (子音記号付与)、After (適用可能な規則)
- Stage 3: Main (音節構造構築)、After (適用可能な規則 (母音字規則等))
- Stage 4: 調整規則
- Stage 5: 清書

4. 読み替え工程**4.1. Stage 1: Preparation (Prep)**

読み替え工程の第1段階として、どの文字列がひとつの記号に対応するかを見定めたり、特異な文字列を一般的なものに変えたりする。具体的には下記を行う。指導の際はまず (a) を徹底し、(b) は後回しということでもよいであろう。

(12) Letter Modification (LM) [Stage 1]

- a. 複数の文字が1つの記号に対応する場合、それらの文字に [] を付ける。ただし、□で囲まれている文字には不要。

例: <ph^one>, <th^ought>, <mo^ovie>

b. 規則の適用が無理なく行えるようにするため、次の操作を行う。

(i) <x> を <ks> にする。例：<excite> → <ekskite>

(ii) 語頭の <wh> を <hw> にする。例：<whale> → <hwale>²

※ ただし who, whom, whose, whole, whore を除く。

(iii) 発音されない <h> に取り消し線を施す (<h> → <h̄>)。

※ 一部の語の語頭 (<hour>, <honest> など) にあるもの。存在しないものと見做される。

(iv) 何らかの子音字の直後にある <re> (<e> = wf, wk) を <ar, or, ur> のどれかに変える。

例：<acre> → <acar>

(b) は後に導入する音節構造構築を容易にするためのものである。(iv) の母音字部分で <i, e, y> が使われないのは、これも後に導入される規則により <c, g> の対応音が特別なものにならないようにするためである。

4.2 Stage 2

ここでは音節構造に依拠しない読み替えをできるだけ行う。ただ、この時点で適用可能な規則は実に様々なものが考えられるが、学習者に一定の方向性を与えておくことが望ましいと思われるため、一連の子音記号付与規則が最初に検討されるものとする。

4.2.1 Stage 2 Main: Consonant Assignment (CAsn)

以下の規則について検討し、可能なら適用する。(この種の規則は Carney (1994) に数多く列挙されている。)

(13) <c, g> Softening (cgSoft) [Stage 2]

<c> と <g> は、直後が <i, y, e> のとき、それぞれ [s] と [dʒ] が与えられる。

ex. (i) [s] citrus, cycle, cent; (ii) [dʒ] gin, gym, gem

(14) <Ch> Rules (ChRs) [Stage 2]

<h> を含む子音字列に対し、下記のように記号を与える。

a. <ch> → [tʃ] ex. chase, search

b. <sh> → [ʃ] ex. show, fish

c. <th> → [θ] ex. think, mat ※ <th> は [θ] を基本とする。

d. <ph> → [f] ex. phone, graph

(15) <C> Default (CDft) [Stage 2]

他の特別な規則が適用されていない場合、下記の形で子音字に子音記号を与える。

a. <c> → [k], <g> → [g], <j> → [dʒ], <q> → [k], <y> → [j]

b. 他の子音字は文字と同じ記号： → [b], <d> → [d], etc.

4.2.2 Stage 2 After

上で触れたように、Stage 2 終了後から、他の規則について検討し、可能であれば適用する。文字情報および語中の位置だけで適用可能な規則には、例えば次がある。

(16) <e> Silent (eSil)

子音字の直後で語末にある弱母音字の <e> は M を付加される。

<Ce> → M (◆ <e> = wk and wf) ex. <name> <mode> <site>

M は次の意味で使用するものとする。(本案全体において同様。)

(17) The Meaning of 'M' (MoM)

M (= mute、無音) は、「最終段階において作成される最終的発音表示に残らない」という意味を持つ。作業工程の途中で削除されるという意味ではない。M を付加された要素も各種規定に関与することがある。

なお、本稿では示されないが、弱母音字を読み替える規則で上述の <e> に何らかの母音記号 (例えば [ɪ]) が与えられたとしても、この <e> には M が加えられているため、最終的な発音表示には残らない。

第 1 節で触れた語末の <a> に関する規則もある。

(18) Strong <a> Final (S<a>Fin) : <a> (◆ wf) → [ɑ:]

例 : spa, pa, ma, ta, gaga, etc.

加えて、次のように、一定の語末文字列の直前にある <o> が、[ou] を与えられるというものも設けられる。(Carney (1994: 350-351) の 0.31 ~ 0.33 を組み合わせたものに近い。)

(19) Strong <o> Lengthening before <l> (S<o>LL)

a. <o> は、<l> (+ <t, d, k, l, ster>) という語末文字列の直前では、[ou] が与えられる。

b. 例 : control, enrol, roll, scroll, bolt, jolt, old, cold, folk, yolk, bolster, holster

幾分例外があったり、該当する語が少なかったりする連鎖があったりするが、有用な規則と思われる。([ou] L tadakel suter (OL ただ蹴る捨てる) という語呂合わせが可能。)

なお、詳述は割愛するが、子音記号が与えられているので、[k, g] の直前にある [n] を [ŋ] に変える規則、直後に子音字が続かない単一強母音字に対応する一定の母音記号を与える規則 (lon, etc.) など、音節構造に依拠しない規則を多く設けることができる。

4.3 Stage 3

ここでは音節構造を構築し、これに依拠した規則が適用を検討される。

4.3.1 Stage 3 Main: Syllable Structure Construction (SSC)

下記 NF (20), OF (21), CF (22) をこの順に適用していく。

(20) Nucleus Formation (NF) [Stage 3, ordered 1st]

次の要素を nucleus (Nuc) とする。

a. 下記の文字列

(i) <s> または <th> の直後で語末にある <m> Ex. prism, rhthm

(ii) <l> 以外の何らかの子音字の直後にあり、M の付いた <e> の直前にある <l>
ex. able, eagle (◆ <e> = M) [Not in <belle>]

b. (まとまりを成す) 母音字全て。ただし、Nuc となった (またはなり得る) 子音字が直前にある場合を除く。

※ つまり、note, life などの M 付き <e> は Nuc となるが、上記 able, eagle などの <e> は除かれる。(a-ii) により直前の <l> が既に Nuc であるためである。

(21) Onset Formation (OF)³ [Stage 3, ordered 2nd]

子音記号 (の連続) を、右側にできつつある音節の onset とする。Nuc に近いものから順に行う。ただし、onset 記号の連続 (の一部) が [sC] (◆ [s] ≠ wi) および語頭に起こり得ないものとなる場合は、当該の操作を行わない。(“—” はまだ記号が与えられていない Nuc 記号の位置。(本来は、文字表示の上に樹形図の構造を描く。) 網掛け = ons。)

ex. [p], [fl], [gr], etc. = OK

but × [bn], × [gb], × [...sC], etc. = NG

[sC] の扱いは横谷 (2007, 2010) に基づいている。これらにおいては [sp, st, sk] しか検討されていないが、本規則集では [sC] 全体に当てはまるものとする。

onset にできなかった子音字は次の規則で coda とする。

(22) Coda Formation (CF) [Stage 3, ordered 3rd]

onset にできなかった子音記号 (の連続) を、左側にできつつある音節の coda とする。

Nuc に近いものから順に行う。

以上に関する例を示す。“□, ○” はこの段階ではまだ与えられていない Nuc 記号の位置で、前者が強母音字に、後者が弱母音字または Nuc となっている子音字に対応するものである。“{ }” は規則適用後に (新たに) 音節に含まれる範囲を示している。

(23) 例

a. <prism> → [pr□s○] —NF→ [pr{□}s{○}] —OF→ [{pr□}{s○}]

(CF (Not Applicable))

b. <smpl@> → [s□mpl○] —NF→ [s{□}mp{l}○] (→Not [...mp{l}○])

—OF→ [s□m{pl}○] —CF→ [{s□m}{pl}○]

c. <activ@> → [□kt○v○] —NF→ [{□}kt{○}v{○}] —OF→ [{□}k{t○}{v○}]

—CF→ [{□k}{t○}{v○}]

- d. <Alhambra>: → [□lh□mbr○] —NF→ [{}lh{}mbr{○}] —OF→
 [{}l{h}m{br}○] —CF→ [{}l{}h{}m{}br{}○]
- e. <dijsc@s> → [d□sk○s] —NF→ [d{}sk{}s] —OF→ [{}d{}s{}k{}s]
- (Not—OF→[{}d{}sk{}s] —CF→ [{}d{}s{}k{}s])
- f. <know> → [kn□] —NF→ [kn{}] —OF→ [k{n}] (CF (NA))
- g. <gnu> → [gn□] —NF→ [gn{}] —OF→ [g{n}] (CF (NA))
- h. <psyco> → [ps□k○] —NF→ [ps{}k{}] —OF→ [p{s}{k}] (CF (NA))
- i. <inn> → [□nn] —NF→ [{}nn] —OF (NA) → CF→ [{}n{n}] —CF→ [{}nn]

(i) においては [n] が2つとも coda に含まれている点にご注意いただきたい。音節構造構築の段階で coda 内の重子音を阻む制約等は本規則群に存在しない。

4.3.2 Stage 3 After

Stage 3 で構築される音節構造に依拠する簡単な規則群として、子音字の無音化に関するものがある。まず onset にも coda にもなれなかった要素に関する概念および規則を設ける。

(24) Stray Element (StrEl) :

表示要素が音節に属していない状態を「無所属 (stray)」と呼ぶ。

例えば上の例で見た know, psyco の語頭要素がこれにあたる。こういった要素に次の規則が適用されることとする。

(25) M-to-Stray (MStray) : 無所属 (stray) な要素は M を付加される。

上の know の [k], psyco の [p], および wrong の [w] などは無所属となり M を与えられるため、最終的な発音表示作成において無視される。また、CF に従えば下記の語末文字列は全て coda となるが、このことが M 付与 (下線部) に利用できる。

(26) <mb> (bomb), <mn> (autumn), <bt> (doubt), <gC> (◆ [C] = [n, m], sign, phlegm)
 対象はそれぞれ順に、「<m> の直後の 」、「直前が <m> の <n>」、「<t> の直前の 」、「<n> または <m> の直前の <g>」であり、みな共通に「coda にある」という条件を満たすものになる。

また、無音の <h> の説明も簡単になる。

(27) a. Brahms, dahlia, baht, Uhtah, etc. (* <a> = [a:])

b. h, hm, Kh, etc. (* <o> = [ou])

これらでは <h> が発音されないが、これは次の規則によって説明可能である。

(28) <h> Silet (hSil) : |h| (◆ Not wi nor ssi) → M [* ssi = strong syllable initial]

条件が「in coda」ではなく、「Not ssi」であるのは ghost, Gandhi, vehicle (本稿では •ve•hi•cle• を想定) のような語における <h> のことを考えてのことである。注 3 を参照されたい。

簡単な母音字規則としては下記がある。「Mの付いた<h>」を利用すると、(27)の語の母音字は次の規則で処理できる。

(29) Strong <a> before <h> (S<a>h) : <[a]h> → [a:] (◆ <h> = coda, M)

(30) Strong <o> before <h> (S<o>h) : <[o]h> → [ou] (◆ <h> = M)

S<a>h (29) の<h>に「coda」という条件が加えられているのは、Gr[ə]ham [grɛɪəm]を考慮に入れたことによる。

簡単とは言えない母音字規則に移る。まず、母音字と母音記号の一般的な対応に関する想定を述べる。(学習者向けには、第3節の項目の中に含めておいた方がよいかもしれない。)

竹林(2019)他の多くの論考に倣い、本稿で言うところの強母音記号を大きく2つに分ける。[æ, e, ɪ, ɒ, ʌ]といった短母音類と[eɪ, i:, aɪ, ou, ju:]といった長母音／二重母音と対応する類である。本規則では横谷(2019, 2021a, 2021b)と同様に前者を「1モーラ記号」、後者を「2モーラ記号」と呼ぶ。2モーラ記号にはさらに2つの系統を設ける。ひとつは「普通」のもので、<[a, e, ɪ, o, u, y]>が各文字の名称と(ほぼ)同じ発音となる([eɪ, i:, aɪ, ou, ju:, aɪ])。もう一つは、竹林(1979)などの記述から察せられる「外国語風」の発音で、<[a, e, ɪ, o, u, y]> [a:, eɪ, i:, ou:, u:, i:]という対応のもので場合である。これで計4つの種類ができるが、それぞれに1m, 2m, 2n, 2fという略号を用いる。m = mora, n = normal, f = foreignである。これを以下にまとめておく。

(31) 強母音字 <[a, e, ɪ, o, u, y]> に対応する母音記号

a. 1モーラ記号 [æ, e, ɪ, ɒ, ʌ, ɪ]——1m

b. 2モーラ記号——2m

(i) 普通 [eɪ, i:, aɪ, ou, ju:, aɪ]——2n ※ [j] 部分は後述する環境で無音となる。

(ii) 外国 [a:, eɪ, i:, ou:, u:, i:]——2f

なお、[r]の直前にある場合、母音記号は次の段階で検討される調整規則により幾分違った形となる。これについては4.4節で述べる。なお、筆者の構想では他に1mの下位区分として1sがあり、2mの中にも2sがあるが、これらは本稿では扱われないため示さない(s = special)。

以上を想定した母音字規則として下記が設けられる。まず、下記の語尾は一定の環境で母音記号の付与に影響を与えVenusが代表的な語の一つであることから、Venus-endingと呼ぶことにする。

(32) Venus-endings: -al, -ar, -ant, -ent, -ance, -ence, -ancy, -ency, -ous, -or, -ate, -ite, -ine, -is, -ive, -us, -um, Mを付加された<e>, etc.

当該の規則は次のように示すことができる。(適用の頻度に関しては横谷(2019)が参考になるであろう。)

(33) Venus-Lengthening (VeL)

単一母音字の <V̄> が音節末にあるとする。その直後の音節（の一部）から語末音節の最後まで連続した文字列が Venus-ending であるとき、<V̄> は対応する 2n 発音の記号を与えられる。

Ex. •aj•da•cent• [eɪ], •vee•nus• [i:], •cri•sis• [aɪ], •bo•nus• [ou],
•a•bu•si•ve• [ju:], •no•te• [ou] (※ ‘•’ = 音節境界)

ここでは、語末の無音の <e> も 2n 化を引き起こす語尾の一つとして扱われている点に注目されたい。一般的には、語末の無音の <e> による長音発音化が知られているが、そういった規則を別個に作る必要がない。なお、他にも、音節末の <V̄> (◆ single) に 2f を与える規則を設けられる。詳しくは横谷 (2021b) を参照いただきたい。

上記のような、いわば特別な規則が適用されない場合のデフォルト母音記号は次の規則によって与える。<ā> に関して特別な条件が付いているため「デフォルト」とは言い難い面があるが、上述の VeL などが優先して適用されるようにするためには、敢えてこの部分を含めることが最善と思われる。wave, wake などには [ɒ] ではなく [eɪ] が与えられるようにするためである。

(34) Strong <V> Default (S<V>Dft)

単一母音字の <V̄> は、他の規則が適用されなければ、対応する 1m 記号を与えられる。

例：<hat> [hæt], <hen> [hen], <hit> [hit], <hot> [hɒt], <hut> [hit], <hymn> [him]

しかし、<ā> は、次のとき [ɒ] を与えられる。

(i) 直前の文字が [w] に対応し、かつ (ii) 直後に [k, g, ŋ] に対応する文字列がない⁴。

例：swan [swɒn], wand [wɒnd], qality [kwɒlɪti]

but wacky [wækɪ], wagon [wægɒn], swanky [swæŋki], etc.

Exceptions: swam [swæm], wham [wæm], etc.

母音記号が発音表示に加わったあと適用検討が可能となる規則として、次の再音節化規則を設ける。主に、一定の環境にある [j] を正しく無音化するためである。Davis and Hammond (1995) の論考を参考にしている。

(35) Yod-Driven Resyllabification (YDR)

[C] は、下記の構造の下線部の位置にあるとき、直前の音節の coda に変わる。(σ = 音節。)

┌──σ──┐ ┌──σ──┐

[...V(X) C(C)jV...] → σ's coda

ただし、(i) X = [r] または [C] と同じ記号

(ii) 左の音節 (σ) の方が右の音節 (σ) より強い

以下に示すいくつかの派生をもって例とする。

(36) a. [...VCjV...] の場合

SSC	VeL/S<V>Deft	YDR
$\langle v\bar{o}l\bar{u}me \rangle$	$\rightarrow [\bullet v \square \bullet l \square \bullet m \circ \bullet]$	$\rightarrow [\bullet v\bar{o} \bullet lju : \bullet m \circ \bullet] \rightarrow [\bullet v\bar{o} [\bullet ju : \bullet m \circ \bullet]]$

b. [...VrCjV...] の場合

SSC	VeL/S<V>Deft	YDR
$\langle c\bar{u}rl\bar{e}w \rangle$	$\rightarrow [\bullet k \square r \bullet l \square \bullet]$	$\rightarrow [\bullet k\acute{r} \bullet lju] \rightarrow [\bullet k\acute{r} [\bullet ju : \bullet]]$
※ $\langle \bar{e}w \rangle = [ju:]$ とする (Carney (1994: 315) など)。なお、最終的には [k\acute{r}lju:] だが、この段階では [k\acute{r}...]。		

c. [...VCCjV...] (◆ [CC] = geminate) の場合

SSC	S<V>Deft, etc.	YDR
$\langle c\bar{e}ll\bar{u}l\bar{o}id \rangle$	$\rightarrow [\bullet s \square l \bullet l \circ \bullet l \square d \bullet]$	$\rightarrow [\bullet s\acute{e}l \bullet lju \bullet l\bar{o}id \bullet] \rightarrow [\bullet s\acute{e}l [\bullet ju \bullet l\bar{o}id \bullet]]$
※ $\langle u \rangle$ (◆ wk, sf) $\rightarrow [ju]$ とする (横谷 (2017) など)。		

d. [...VCCcjV...] (波下線部が同じ記号) の場合

SSC	S<V>Deft, etc.	YDR
$\langle \bar{a}ffluent \rangle$	$\rightarrow [\bullet \square f \bullet fl \circ \bullet \circ nt \bullet]$	$\rightarrow [\bullet \acute{a}f \bullet flju \bullet \acute{a}nt \bullet] \rightarrow [\bullet \acute{a}ff [\bullet lju \bullet \acute{a}nt \bullet]]$
※ $\langle u \rangle$ (◆ wk, sf) $\rightarrow [ju]$ とする (横谷 (2017) など)。		

e. 「 σ の方が右の σ より強い」があてはまらない場合

SSC	VeL/S<V>Deft, etc.
$\langle vol\bar{u}min\bar{o}us \rangle$	$\rightarrow [\bullet v \circ \bullet l \square \bullet m \circ \bullet n \circ s] \rightarrow [\bullet v\bar{o} \bullet lju : \bullet m\bar{i} \bullet n\bar{o}s] \rightarrow \text{YDR (NA)}$

(d) - (e) における [j] は最終的には発音されない。このことについては 4.4.3 節で述べる。

4.3.3 重子音字の扱いについて

第1節で触れた重子音発音解消は次の規則で処理する。まず、geminate (重子音) を次のように定義する。

(37) Geminate (Gem)

同じ子音記号の連続は geminate (重子音) と呼ばれる。例 [...pp..., ...dd..., ...ff...] etc.

※ ただし、本規則集では、全く同じでなくとも、「ほぼ同じ」と言える発音の構えが連続する下記も含める。例 [...ttf..., ... ddj ...]

関係する記号の1つを無音化する必要があるが、これに関して次の規則と制約を設ける。まず、geminate 構成記号の一方を最終的に無音にする規則である。規則に基づいた生成音韻論の論考である Jensen (2022: 254) などとは異なり、発音されなくなる記号が環境により変わる。

(38) No Geminate (NoGem)

geminate を構成する記号は、coda 記号の中で最も音節末に近い場合、M が加えられる。

例：(i) [... **C** ▪ **C** ...] → M (ii) [... **CC** ...] (◆ both in coda) → M

重子音の解消を上のように定めると、複数音節に跨る **geminate** の場合は第 1 記号に、coda 内に生じる場合は第 2 記号に M が付加されることになる。

(39) [**C**] = M a. •**com**•mon• [**m**•m], •**hap**•py• [**p**•p], •**ad**•**ju**st• [**d**•dʒ], etc.

b. •**ebb**• [**b**•], •**add**• [**d**•], •**off**• [**f**•], etc.

NoGem の条件にある「最も音節末に近い」は、学習者への提示においては「最も右」でもよいであろう。

次に、**geminate** が 2 記号とも無音となることを阻む制約を設けておく。

(40) No Two Ms (No2M)

規則の適用環境が満たされても、**geminate** の 2 記号両方に M が付加されることになる場合、その操作は行われない。

この制約を設けたのは以下の理由からである。例えば、(36c) の **celluloid** では Stage 2 の子音記号付加によって [ll] という **geminate** ができ、Stage 3 で音節構造が与えられることによって NoGem の検討が可能になる。適用条件が満たされているため 1 つめの [l] に M が付加される (▪ **ce**ll ▪ u ▪ **lo**id ▪)。その後 YDR によって 2 つめの [l] が第 1 音節の coda となる (▪ **ce**ll ▪ u ▪ **lo**id ▪)。これによりこの 2 つめの [l] も NoGem の検討対象となるが、これにも M を与えると [l] が 2 つとも発音されなくなってしまう (× ▪ **ce**ll ▪ u ▪ **lo**id ▪)。このような、「**geminate** 全体の無音化」を阻む方策が上記の制約というわけである。

4.4 Stage 4: Adjustment (Adjust)

ここでは、前段階までに与えられた構造に調整を施し、最終的な表示に近づける。規則が 4 つあるが、順序付けの必要はない。

4.4.1 2m 母音の調整

4.3.2 節で触れたように、<r> の直前にある 2m 記号は母音字規則で与えられたものとは違った形になる。これを下記の調整規則で処理する。文字表示ではなく発音表示に適用される規則なので、2m 記号であれば、<ai> → [eɪ], <oa> → [oʊ], <ou> → [aʊ], <oi> → [ɔɪ] といった二重母音字規則から生じたものであっても適用される。(二重母音字の規則に関しては竹林 (2019) などを参照いただきたい。)

(41) Vowel Adjustment before <r> for 2m (VAR2m) [Stage 4]

a. [**er**] → [eə] ex. **care**, **share**, **pair**, etc.

b. [**ir**] → [ɪə] ex. **here**, **mere**, **beer**, etc.

- c. [aɪr] (◆ [r] = wf) → [aɪə] ex. hire, fire, lire, etc.
 d. [oʊr] → [o:] ex. core, more, bord, etc.
 e. [...u:r] → [...uə] ex. cure, demure, coiffure, etc.
 f. [aʊr] (◆ [r] = wf) → [aʊə] ex. hour, devour, flour, etc.
 g. [ɔɪr] (◆ [r] = wf) → [ɔɪə] ex. coir

この規則においては、調整を引き起こす [r] に特別な条件はない。一部において語末という指定も加わっているが、求められているものは基本的に各母音記号と [r] の隣接性だけである。Sinclair (2006) に見られる特筆すべき例外は guru [gú:ru:] だけである。

4.4.2 1m 母音の調整

1m 記号も [r] の直前で調整を受けることとする。この場合、[r] には「coda にあり、かつ M ではない」という条件を付ける必要がある。S<V>Dft (34) で与えられる母音記号が主な適用対象である。(c) の例の最後にある Byrd は人名である。)

(42) V-Adjustment before <r> for 1m (VAR1m) [Stage 4]

◆ [r] = in coda and Not M

- a. [æɪr] → [ɑ:] ex. •star•, •art•, •car•, etc.
 b. [ɔɪr] → [ɔ:] ex. •norm•, •lord•, •port•, etc.
 c. [ɪr] → [ɜ:] (◆ [V] = other 1m symbol) ex. •a•lert•, •stir•, •fur•, •Byrd•

[r] の条件として「Not M」が含まれているのは、次のような語の存在による。coda にあっても、NoGem (38) によって M となる [r] は調整を引き起こさないのである。(例は英国発音であり、語末の [ɪ] は、本稿では扱わない他の規則で [i] に変わる。)

- (43) [r] = M •car•ry• [•kær•rɪ•], •ber•ry• [•bér•rɪ•], •mir•ror• [•mír•rər•]
 •hor•ror• [•hór•rər•], •cur•ry• [•kúr•rɪ•]

当該母音記号の直後にある [r] が皆、「最も音節末に近い coda 記号」という条件を満たしている点にご注意いただきたい。これらに加えられた M が 1m 母音記号調整の適用を妨げると同時に、左側の [r] を最終的に無音にする。

coda 内の geminate [r] の例を見ておく。CF (22) は、onset になれなかった要素全てを coda に入れることを思い起こされたい。網掛け部分が coda で、下線は M付き記号を表す。

- (44) •Starrr• [æ] → [ɑ:], •Orr• [ɔ] → [ɔ:], •murrh• [ɪ] → [ɜ:]

これらにおいては、「最も音節末に近い coda 記号」にあたるものが2つめの子音記号であるため、それらに M が与えられる。母音記号直後の [r] ではない。VAR1m の適用環境が損なわれないため母音調整が可能となる同時に、[r] が1つ分しか残らないことも説明できる。

なお、<starry> [stú:ri] は carry と同様の文字構成であるにも関わらず調整を受ける。これについては次のように考えておく。まず、<y> は Class II 接辞であるため、これが付加

される前に <star> 部分の発音が定まっている。<r> の二重子音字化には inferring [ɪnfɜːrɪŋ], abhorred [əbˈhɔːrd] などにおいて <r> が重ねられることと同じ原理が働いている。語の範囲を超えていると言えるため、これに関する規則は本稿では提示しない。

4.4.3 [j] の無音化について

良く知られているように、音節末の <u> などにより発音表示に [j] が生じても、これが発音されないことがある。状況を以下にまとめる。

(45) a. 必ず無音化 = [ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, r, j, w] の直後

ex. June [dʒuːn], chute [ʃuːt], ferrule [féru:l], etc. (Not [juː])

b. 環境により無音化 = [l] の直後 ex. voluminous [vəluːnɪəs] but volume [vɒljum]

(a) の子音記号に含まれる [r] について述べておくと、同じ単語内の [rj] という連鎖は非常に限られているということがある。Sinclair (2006) の見出し語の中で「<r>+ “[j...]”に対応する可能性がある弱母音字”」を含む語には下記があるが、英国発音において [j] が伴うものは (b) の 2 語のみである。

(46) a. [...ru...] or [...rə...] corrugated, garrulous, erudite, erudition, querulous

b. [virju...] virulence, virulent

erudite, erudition の米国発音では [j] が見られるが、Mayor (2009) においては、そのようにはなっていない。virulent に関しても同様である。(発音表示はないが、virulence も同様と見做せる。) 従って、少なくとも英国発音においては、[rj] という語中連鎖は希少であり、基本的には排除すべきものと見做せる。ついては、(b) の 2 語は例外とする。

(45) の分布は Stage 3 After で適用可能となる再音節化規則 (YDR (35)) と Stage 4 (= 本段階) に設ける次の調整規則によって処理できる。(環境を作る子音記号が多く、一見、指導が困難のように思われるが、筆者の経験では、語呂合わせなどで十分対応可能である。)

(47) Yod Silent (YSil) [Stage 4]

[j] (=yod) は、以下の記号の直後にあるとき M を付加される：

[ʃ, ʒ, tʃ, dʒ, r, j, w] および onset にある [l]

これを調整規則として Stage 4 におくのは、Stage 内の順序付けを用いることなく、この規則の検討がなされるのを YDR よりも後にするためである。以下に delude [dɪluːde], prelude [préljuːd] を例にとって派生を示す。

(48) a. SSC VeL/S<V>Deft, etc. YDR (NA) Stage 4: YSil
 <delude> → [•d○•l□•d○•] → [•dɪ•ljúː•d○•] → [•dɪ•ljúː•d○•]
 M

b. SSC VeL/S<V>Deft YDR Stage 4
 <prelude> → [•pr□•l□•d○•] → [pré•ljúː•d○•] → [pré•ljúː•d○•] → YSil (NA)

(a) の delude は、VeL によって <u> に [ju:] が与えられるが、環境を満たさないため YDR を受けることはない。従って直前の [l] は onset 要素であり続け、Stage 4 で YSil を引き起こし、[j] は最終的に無音となる。一方、(b) の prelude の第 2 音節にも [ju:] が与えられるが、直前により強い音節があるなどの条件を満たすため、YDR が適用される。これにより、[l] は第 1 音節の coda に位置することとなり、[j] は Stage 4 の YSil を受けず、最終的な発音表示に残る。

ちなみに、YDR と YSil が geminate [r] を含む語に対してどのように振る舞うかを見ておく。geminate [r] の第 2 記号も YDR の対象になり得るため新たに「coda 内 geminate」ができるが、これに NoGem が再び適用されることはない。Stage 3 Main の直後に第 1 記号が既に M となっているため、第 2 記号に M を与えることは No2M (40) によって阻まれるからである。ferrule [féru:l] を例にとり示す。

- (49) a. Stage 3 SSC, NoGem M VeL/S<V>Deft M YDR M
 <férrule> → [•f□r□r□l○•] → [•fér•rju:•l○•] → [•fér•ju:•l○•]
 → NoGem (NA due to No2M (40))
- b. Stage 4 VAR1m (NA), YSil M M
 → [•fér•rju:•l○•]

1 つめの [r] は M であり続けるため、同じ音節にある <e> が Stage 4 で VAR1m の影響を受けることはない。なお、YDR のような再音節化規則は他にも設けた方がよいかもしれないが、検討は別の機会としたい。

4.4.4 [r] の処理

英国発音では、語中の [r] は直後に Nuc が続かない限り発音されない。このことを次の規則で表現する。

(50) No [r] (NoR) [Stage 4]

[r] は、直後に Nuc 記号が続かない場合、次の操作を受ける。

- a. 語末の場合 → () [※ () で囲まれる。]
- b. その他の場合 → M を付加される。

※“() ”は語より上のレベルにおいて母音記号が続かない限り発音されないことを表すものとする。

これにより、border のような語では 1 つめの [r] が完全に無音となり、2 つめの [r] は句や文のレベルで母音で始まる語が続く場合に発音されることになる。

なお、coda に生じた geminate が NoR によって 2 記号とも M となることはない。No2M

(40) があるからである。例えば *catarrh* [kotá:r] のような語は 2 つめの [r] に M が付いた状態で Stage 4 に入る。1 つめの [r] は NoR (50) の適用条件を満たすが、適用すると geminate 全体が無音となるため、この操作は行われない。

4.5 Stage 5: Finalization (Final)

ここで最終的な発音表示を完成させる。(fair copy = 清書。)

(51) Fair Copy Making (FCM) [Stage 5]

M の付いていない発音記号および括弧を書き出し、[] で囲む。

音節構造を気にせず最終的な発音記号の並びを得るためだけであれば以上で全ての工程が終わる。無音の <e> を中心とする音節構造が存在したままになっているが、これをどのように処理するかについては、紙幅の都合上、本稿では扱わずにおく。

5. まとめ

本稿では英単語スペリングと発音の関係に関し、上級英語学習者向けの規則集試案を提示した。本案の特徴を改めて述べておく。まず、音節という概念を重要なものとして活用している。少なくとも、一定の語尾を持つ語に対する母音記号付与やその調整を過不足なく指導するには、VeL (33)、VAR1m (42) またはこれに類似した、音節という概念に基づいた規則を提示することが必須と思われる。もともと、英語の発音をある程度の詳細さ緻密さをもって教える場合、この概念は欠かせないものである。リズムやイントネーションのピッチ変化の始まる位置などを「音節」という言葉を使わずに説明することは不可能に近い。区切りの指導に関しては慎重にあたる必要があるが、基本的なものに限れば、「語頭に見られる子音連鎖」か否かの判断に困る学習者は本稿が想定している者の中には皆無であろう。しかしながら、音節を大々的に利用した精密な規則集は筆者の知る限り存在しない。この意味で、関係領域における本稿の貢献度は低くないと言える。

次に、読み替え工程および関係する規則の適用の仕方が明確になっているという点も特筆に値すると考える。規則が (i) 規則適用前の準備段階、(ii) 文字情報のみに基づく規則 (主に子音字記号付与)、(iii) 音節構造構築規則 (と母音記号付与他)、(iv) 最終的な調整規則、そして (v) 清書というグループに分かれており、作業過程における位置付けは分かりやすいと思われる。つまり学習者の負担が少ないものと言える。しかも、各段階内の規則間に順番が決められていたとしても、音節構築上の手順に沿った自然なもののみである。具体的には、次の形を取っている。まず、所属段階が決められているものとして下記がある。Stage 3 Main には適用順序に関して自然な指定があるが、これを除けば、段階内の規則の間に適

用順序の指定はない。

(52) Stage と所属規則

- a. Stage 1: 準備 (LM (12))
- b. Stage 2: Main: 子音記号付与 (cgSoft (13), ChRs (14), CDft (15))
- c. Stage 3: Main: 音節構造 (NF (20), OF (21), CF (22) [この順序で適用])
- d. Stage 4: 調整 (VAR2m (41), VAR1m (42), YSil (47), NoR (50))
- e. Stage 5: 清書 (FCM (51))

他の規則は、Stage 1, Stage 5 では検討されないということを除けば、適用段階が決められているわけでも、個々の間の適用順序に関し指定があるわけでもない。適用条件等により適用が可能となる最初の段階を示すと下記となる。

(53) 他の規則 (※ Stage 指定と順序付けなし)

- a. Stage 2 After から可能: eSil (16), S<a>Fin (18), S<o>LL (19)
- b. Stage 3 After から可能: MStray (25), hSil (28), S<a>h (29), S<o>h (30),
VeL (33), S<V>Dft (34), YDR (35), NoGem (38)

加えて、規則体系全体に関わる主たる概念や制約として下記がある。当然ながら適用順序という概念はあてはまらない。

(54) 概念と制約: MoM (17), StrEl (24), Gem (37), No2M (40)

こういった適用順序付けの最少化を可能にしている大きな要因は「最終段階で発音表示に残らない」という概念の導入と思われる。工程途中でなくなることはないので、最終的な発音表示に残らない音およびこれと関係する規則を作りやすい。単純な「削除」という道具立てしかない場合、例えば、c[̣]arry で [æ] を保つためには、「母音記号付与→母音調整→重子音解消」という順番にせざるを得ない。しかし、s[̣]ign のような語で <[i]> に [ai] を与える自然な流れは、「[g] の削除→[ai] 付与」であろう。何らかの理由で [g] が削除され、空いたスペースを埋めるために発音に時間のかかる母音が補われるというものである。そうでない場合、[ai] の付与される環境は例えば「語末の <n> の直前にある <g> の直前にある <[i]>」とする必要が生じる。[g] の振る舞いに関する全く同じ環境を複数の規則に盛り込むことになる。この2つの語を考えるだけでも、「削除」という操作のタイミングを指定する必要が生じる。一方、本モデルにおいては、[rr] の第1記号も、<n> の直前の <g> に対応する [g] も、実際に消えるのは最終段階である。s[̣]ign への母音記号付与は、(i) 「coda にある <n> または <m> の直前の <g> には M が付加される」 (= (26))、(ii) 「M の付いた <g> の直前の <[i]> は [ai] が与えられる」という規則を設けるだけで達成される。

残された課題としては次がある。まず、本試案で取り上げられた規則類の有用性を検証する必要がある。Carney (1994) においては各規則の説明力が示されているが、本案が検討対象とした語彙における状況を把握しておくべきであろう。一部の規則 (Venus-

Lengthening) に関しては横谷 (2019) で調査されてはいるが、確認が必要である。また、無音の <e> を除き、弱母音字の発音が扱われていない。最後に、本案は母音字の強弱が分かっている場合に有効なものであるので、母音字の強弱を導き出す規則集の開発が望まれることは論を待たない。

<注>

1) 強母音／弱母音という分け方は基本的に竹林 (1996: 273-280) に基づく。強勢符号がなく直後に子音が続かない [ou] と [ju:] は、横谷 (2021a: 101) では強弱が分からないとされているが、学習者の負担軽減のため、本稿の規則では弱母音としておく。少なくとも、このような母音が「必ず強く発音される」という記述は見当たらない。

2) <wh> の発音に関しては、このように文字を入れ替えておくことで、Stage 3 で行われる音節構造構築を簡潔なものにできる。本稿では詳述しないが、4.4 節で導入される強音節頭にない |h| を無音化する規則が、[w] の直前にある |h| の場合、英国発音では義務的、北米発音では随意的と想定すれば概ね事実を捉えられる。who などにおいて <w> が発音されないのは、これらの語がこの入れ替えの例外になっているからと見做せば、後述する音節構造の観点から説明できる。[wh] が onset になれないため [w] が無音となるというものである。

3) ここで提示するものだけでは、cirrhosis, Gandhi, aghast, Bonham などでは |h| が発音されず、abhor, adhere などでは発音されることが説明できない。紙幅の都合で詳細は別の機会に述べたく思うが、これは、いくつかの例外は認めざるを得ないものの、次のようにして処理可能となる見込みである。概略、下記2つを補助的規則として追加し、後述する |h| の無音化 (= 語頭でも強音節頭でもない場合は M) を利用するのである。

(i) [Ch⁻] → Ons (◆ h = onset, C = wi) [ex. •lhér•zo•lī•te•, •Lhā•sa•]

(ii) [Ch⁻] → Ons strong weak
(◆ h = onset; C = Not from prefix or not [l, m, n]; Not if “-Ch-”)

ex. •cir•rhō•sis•, •a•ghast•, •Gān•dhi• but •ab•hōr•, •Al•hām•bra•, •puk•hā• [pʌkə]
なお、次の語の |h| には上記 (i), (ii) のいずれも適用されないため、「語頭でも強音節頭でもない位置の |h|」となり、M が加えられる：•an•nī•hī•lā•te•, •Grā•hām•, •prō•hī•bī•
•ti•on•, •vē•hī•cle•, •vē•hī•ment•.

参考文献

・日本語文献

- 竹林滋 (1979) 「現代英語における外来語発音の変動」『東京外国語大学論集』第 29 卷, 東京: 東京外国語大学, 19-54.
- (1996) 『英語音声学』東京: 研究社.
- (2019) 『新装版 英語のフォニックス』東京: 研究社.
- 横谷輝男 (2007) 「英語の母音間 [s]-無声閉鎖音連鎖における [s] の coda 性について」, 『英文学思潮』第 80 卷, 青山学院大学英文学会, 277-299.
- (2010) 「英語の母音間 [s/+無声閉鎖音] 連鎖における /s/ の coda 性について—主強勢配置の観点から—」, 吉波弘他 (編) 『英語研究の次世代に向けて—秋元実治教授定年退職記念論文集』, 東京: ひつじ書房, 23-35.
- (2017) 「弱母音の < u > のための発音規則」, 『英文学思潮』(90), 青山学院大学英文学会, 19-45.
- (2019) 「主強勢開次末音節にある < a, e, i, o, y > の発音について」, 『英文学思潮』第 92 卷, 青山学院大学英文学会, 29-54.
- (2021a) 「主強勢開次末音節にある < a, e, i, o, y > の発音について—異なる観点から—」, 『紀要』(62), 青山学院大学文学部, 95-111.
- (2021b) 「主強勢開次末音節にある < a, e, i, u > の外国語風発音について」, 『英文学思潮』第 94 卷, 青山学院大学英文学会, 131-154.

・英語文献

- Carney, E. (1994) *A Survey of English Spelling*, London and New York: Routledge.
- Davis, S. and M. Hammond (1995) “On the Status of Onglides in American English,” *Phonology* 12, 159-182.
- Jensen, J. T. (2022) *The Lexical and Metrical Phonology of English*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mayor, M. (2009) *Longman Dictionary of Contemporary English* (5th), Essex: Pearson Education Limited.
- McCarthy, J. J. (2008) *Doing Optimality Theory*, MA: Blackwell.
- Sinclair, J. (2006) *Collins COBUILD Advanced Learner’s English Dictionary* (New Edition), Glasgow: HarperCollins.